

一冊の本と一緒に手紙が届いた。2009年9月、この「土曜コラム」で紹介したヒロコ・ムトーさんからだった。

「ご無沙汰しています。このたび、こんな本を書きました」で始まる文面には次のようにつづられていた。

「私が書こうと思ったのは、震災後1カ月もたない時、新聞に大きく載った子供たちの笑顔がきっかけです。まだ避難所の中なのに、体育館で、校庭で、着の身着のままの子供たちの輝くような明るい笑顔。苦しく辛く悲しいはずの子供たちの力強いあの笑顔。ガンと一発やられたような気がしました」

◇ ヒロコさんはいま60代後半。秋田の出身だが、10歳まで山形に住んでいた。山形

土曜コラム マルチ アングル

市の地蔵町（現在の七日町）に家があって、東原幼稚園を卒業し、小学5年生まで山大付属小学校に通った。

今は横浜に住んでいて、全国各地の中学校などを訪ね、「心の宅急便」のタイトルで講話を続けている。仲間と共に

ヒロコさんからの手紙

詩の朗読やハーブ演奏などを紹介しながら「生きる力と、いじめなどに負けない勇気をつかんでほしい」と訴える。

◇ その原動力は、不自由な目にもかかわらず88歳にして豆紙人形の個展をパリで開いたおばあちゃんの人生がある。

◇ 東日本大震災から半年以上が過ぎ、あらためて「3・11」を考えると昔ではないかと思っていた。さまざまな論評がある中で、当たり前のことが当たり前でない限り、これまでの生き方、価値観、全

あらためて今「3・11」

てをひっくり返した「エポックメイキング」だという人がいるが、果たしてそれは本当なのだろうか。

◇ 原発問題一つをとっても、今後どうしたらいいのかうまく整理できない。あれだけの被害を出しているのだから「脱原発」は当然だろうと思うけれど、日々の生活や日本経済を考えると、結局は何も変わっていないのではないのか。

◇ ノーベル賞作家・大江健三郎さんやエッセイストの落合恵子さんが参加した先ごろの何万人もの集会を見ると、日本がこの先真っ二つに割れてしまうのではないのか。人と人とのつながりが大切だと言いながら、また対立してしまうのではないのか。心配の方が先に立っていた。

◇ そんな疑問にヒロコさんはどう答えてくれるのだろうかと思いつつ読み進め、そして、ある場所が目が止まった。

「心の宅急便」の仲間に、大きな被害を受けた宮城県気仙沼市出身のK子さん。友人や知人は家族を失い、家を失った。そこでヒロコさんら仲間は一斉に立ち上がった。たった一日で大きな段ボール10箱の衣類などが集まった。

◇ 「この1分が勝負なのに、予定、検計中と口先だけで具体的な対策も実行もなく、見通しさえつかないどこかの国のアホタレ政治家ども、よく見ておけ！」

新著のテーマは「一度しかない人生だから」（海竜社）。

帯には「幾つになっても人生は挑戦」とあった。ヒロコさんは「あとがき」で、「今日はあなたの残りの人生の最初の日」の言葉が好きだと書いていた。そうなのだ。やらなければならぬことはいっぱいある。

◇ 起きてしまったことを振り返るより、もっといい日本に生まれ変わるよう前に進む。ありきたりかもしれないが、そう思う。「3・11」の意味に、すぐに答えは出ないかもしれないが、子供たちの笑顔に日本の明日を信じよう。

吉野剛朗 論説委員